

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

活動レポート&事業ビジョン

2019 年度版



子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖

碧いびわ湖の活動へのご理解ならびに参加と協力を賜り、誠にありがとうございます。この一年、お世話になった皆様への感謝を込め、2018年度の活動成果と今後の事業ビジョンを記しました。旧環境生協から事業を継承して今年で10年。草の根自治の変わらぬ心を引き継ぎ、子どもたちが安心と希望を胸に育っていける社会づくりに取り組みます。引き続きのご参加とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。 2019年5月 代表理事 村上 悟

【地域づくり】 自然のなかで子どもと育つ

子どもたちは、自然の中で、ワクワク、ドキドキ！ときに、キケンもとなりあわせ——そんな環境で、たくましく生きる力を育みます。大人たちも、主体的に運営に参加してくれて、協力しあい、信頼関係をきづきます。



野洲川下流部、守山市中洲地区での体験学習。異年齢の子ども集団。大人たちも楽しんでいます！



あおいそらと森のおうちプロジェクト（ASMO）
草津市の草津川跡地公園 ai 彩ひろば、および、守山市立図書館にて、お母さんの居場所を開催しました。



守山市中心市街地を流れる吉川川（あまが池親水緑地）
今年3月には、高校生と幼稚園児のコラボが実現。
小さな自然再生と水辺のまちづくりにチャレンジ！

●新しい仲間との出会いをつむぐ

碧いびわ湖と、こども園そら（草津）、ちいさいおうちようちえん（守山）、せた森のようちえん（大津・栗東）とのパートナーシップにより進めています。乳飲み子をかかえるお母さんのホッと一息つける場「あすもの日」を草津と守山で7回、開催しました。



●野洲川の川守りをつなぐ

野洲川下流部、守山市中洲地区にて、子どもたちが、川で遊び、学び、育つプログラムを、子育て中のお父さん、お母さんたちと、ともに運営しています。川遊びに加えて、河道内に生えてくる樹木の伐採も行いました。



●科学的なアプローチで小さな自然再生

守山の中心市街地に、ほたるが自生する河川環境をつくるため、滋賀県立大学の瀧健太郎さん（碧いびわ湖理事）にご指導いただき、県立守山高校の生徒さんと一緒に活動しています。バープ工と呼ばれる簡易水制を設置し、かつ、河川空間を自分たちで測量し、コンピューター上の3次元座標でプログラム。川の水の流れをシミュレーションして、ほたるの幼虫がすめる河床づくりにチャレンジしています。



<数字で見る 地域づくり事業の成果>

●小さな自然再生受託	1箇所	●講座受託	1講座・全4回
●講演・研修受託	12件		

【住まいづくり】 **みんなで作る暮らしの基盤**

顔の見える仲間と協力し合って、身近な自然を活かした暮らしのできる住まいづくり・インフラづくりに取り組んでいます。プロの力を借りつつも、暮らす人々が主体となって自らつくり関わることを大切にしています。



「好きな暮らし、ひとつまみ。～お父さんも8割満足の休日～」古民家の壁塗り体験。(日野町)



オムロン野洲工場でのヨシを使った小屋づくり



「島の未来をつくる会」沖島のエネルギー自給を考える

●お父さんも参加できるWSを開催

11月から2月、「好きな暮らし、ひとつまみ～お父さんも8割満足の休日～」を5回シリーズで開催しました。碧いびわ湖での住まいづくりを実践された方のお宅を会場に、エディブルガーデンづくりと干し柿づくり、古民家の土壁塗りと日野菜漬け体験、竹林整備、庭木の剪定と味噌づくり、薪割りとヒンメリづくり、と、家族揃って暮らしを楽しむ一日を体験いただきました。冊子「ためになるオトコの休日」も発刊し、楽しみながら家族の役に立つ暮らしの提案をできました。
(滋賀県・地域エネルギー活動支援事業補助金を活用)



自治会館の防災設備として、雨水タンクを設置（湖南市・菩提寺）

●社員参加でヨシを使った小屋づくり

11月から12月にかけて、株式会社ラーゴさんからのご依頼で、株式会社オムロンさんの野洲工場のビオトープで、ヨシをつかった小屋づくりを担当させていただきました。基礎業者さん、大工さん、ヨシ屋さん、竹屋さん、kikitoさんとのつながりとワークショップのノウハウを活かし、地域の材料と人の力、そして社員さんの力を集めて、素敵な小屋ができました。



福祉施設での太陽熱利用設備の設置を今年も実施（高島市・元気な仲間）

●市民協同でのエネルギー自給の学習会

2月から3月にかけて、沖島町離島振興協議会と協力し、「島の未来をつくる会」を開催しました。講師の宝塚すみれ発電の井上保子さんから、市民発電所づくりの体験を基に、市民の協同とエネルギー自給により、市民主体の地域づくりが実現できることを学びました。



沖島で初となる薪ストーブの設置（汀の精）

<数字で見る 住まいづくり事業の成果>

●雨水タンク設置	7件	●太陽熱温水器設置	5件
●木質燃料ストーブ・ボイラー設置	3件	●その他リフォーム等工事	22件
●ワークショップ・学習会・体験会	7回		

【買いものづくり】 心が通う買いものをつくる

つくるひと、たべる人、はこぶひと、みんなが笑顔になれる、心の通う買いものづくりに取り組んでいます。使い終わった資源も再利用できるよう、循環の輪も守り育てています。



どっぽ村の大戸洞舎（おどふらしゃ）のみなさんが「森のようちえんえくぼ保育園」を訪問。（大津市）



京大農業ゼミの省農薬みかん園で収穫体験（和歌山県下津）



Laque 漆崎さんのワインが初出荷（東近江市愛東）

●お米を通じた子育てのつながり

8月に、どっぼ村で子育てについて語り合う会員交流会を開催しました。2018年に開園し、給食にどっぼ村のお米をお使いいただいている「森のようちえん・えくぼ保育園」からも保護者の方々がご参加いただけたことがきっかけとなり、12月にはどっぼ村の大戸洞舎のみなさんがえくぼ保育園を訪問し、子どもたちや保護者の皆さんと交流する機会を持ちました。互いに子どもたちの育ちを支える親同士として、想いを共有することができました。

●省農薬みかんの継承

2017年末に生産者の故仲田尚志さんが急逝され、園の存続が危ぶまれた京大農薬ゼミの省農薬みかんでしたが、農薬ゼミのみなさんと共に、新たな生産者の大柿肇さんとの関係を構築し、継続することができました。あまいろ探偵団も訪問して収穫体験をし、あまいろだよりの特集記事ができました。

●漆崎さんのワインが初出荷されました

2013年から愛東で新規就農をされ、碧いびわ湖でもぶどうの共同購入をおこなってきたLaqueの漆崎厚史さんが仕込まれたワインが、初めて出荷されました。夫婦で自分たちのワインをつくりたい、との就農時の想いが、6年越しで実現されました。

<数字で見る 共同購入事業の成果>

お米購入量	5,248kg	省農薬みかん購入量	5,325kg
リサイクル粉せっけん購入量	3,137kg	←原料用廃食用油回収量	8,007L
リサイクル液体せっけん購入量	1,902L		
リサイクルトイレットペーパー購入量	10,467袋	←原料用牛乳パック回収量	318,517kg
リサイクルティッシュ購入量	4,477袋		



8月にはどっぼ村で会員交流会を開催。



省農薬みかん園に新規就農の大柿肇さん。



液体せっけん「ゆう」は、引き続きお母さんたちが手作り。クラウドファンディングの返礼品にもお使いいただきました。

子どもと湖が笑ってる未来へ

—— 11年目のチャレンジ。安心を実感できる暮らし、命あふれる琵琶湖をめざして



「さつきチラシを置いてもらいに市の担当課に行ってきた。話を聞いてくれた職員さんが、話を聞いて“私達もこういう場所があるととても助かります”って言ってくれた。私にも出来ること、あるんやなあって、胸をはれる気分になった。」

という報告メールが、あおいそらと森のおうち（ASMO）のメーリングリストに流れてきたのは、ミーティングがあった日の夕方。ミーティングでのほかのメンバーの話にピピピッときて、思い立って行って見たとのことでした。報告を聞いた私も、なんだか、とっても満たされた気持ちになりました。ともに活動してくださるたくさんの仲間へ感謝です！

（碧いびわ湖 常務理事・根木山恒平）

★碧いびわ湖になって10周年！

さて、碧いびわ湖が、前身の環境生協から事業継承した2009年8月から、今年でちょうど10年を迎えます。1977年にはじまる「琵琶湖のせっけん運動」を受け継ぐ市民組織として、この10年間、子育て世代の仲間づくりや、その他、さまざまなことにチャレンジしてきました。

実際のところ、失敗や、うまくいかないこともたくさんありますが、10年前にはなかった、た

くさんの子育て世代の仲間ができました。

私たちが望む暮らし、社会を、力をあわせてつくっていく。そのいとなみ、プロセスを大切にしたいと思っています。人それぞれ、いろんな思いがあり、事情もあり、自らが望むよう行動することは、そんなに容易ではありません。まして、違いのある他者とともに行動することには、困難が伴います。でも、他者とのかわりを通して、気づくことがあり、励まされ、自分ひとりではか



なわなかったことが実現することがあり、そこに大きな喜び、やりがいがあると感じています。

ひきつづき、碧いびわ湖における仲間たちとのチャレンジに、ご参加いただき、力を与えてくださいますよう、お願い申し上げます。

★NPO 法ができて 20 年の振り返り

ところで、昨年は、NPO 法ができて 20 年の節目の年にあたり、全国でこれまでを振り返り、今後の展望を語り合う機会がもたれました。私たちが参加した場で、語り合われていたことの中で、印象に残ったいくつかのことをご紹介します。

まず、この 10 年くらいでしょうか「ソーシャル・ビジネス」という言葉が盛んに言われるようになりましたが、そうした中で「NPO が企業化している」という批判的な指摘がありました。また、介護保険制度にもとづく福祉事業などがわかりやすい事例ですが、NPO も民間のサービス事業者として、一見、市場競争のなかに置かれつつ、反面、行政が規定する報酬単価などには、市場原理は働かない——つまり、そもそも採算のあわない事業の担い手として、低コストに人員を動員する受け皿になってはいないか、という問題提起もありました。さらに、行政との関係で言っても、行政から NPO への業務委託が増え、委託元と先という関係がつけられることで、本来は、人びと

の自発的な組織であって、その声を行政に対して積極的に伝えていく NPO の果たすべき役割が発揮できていないという声もありました。

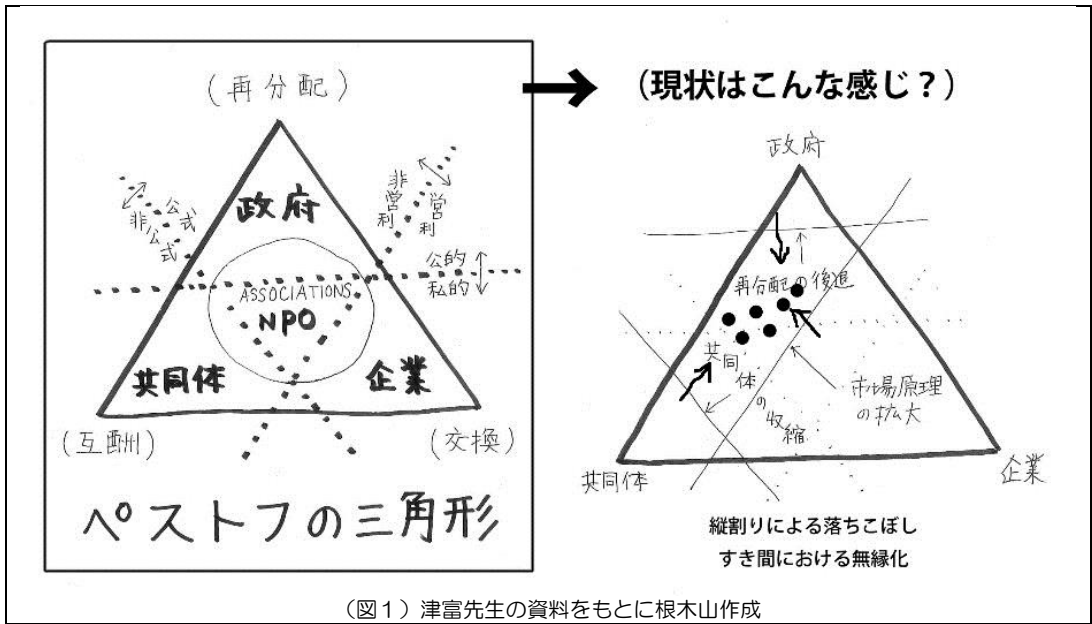
今後に向けては、ソーシャル・ビジネスという潮流とは別の軸として、あらためて NPO が、人びとの“参加と協力”を促進する社会的な役割をはたすことの重要性が提起されました。さらに、ビジネスというとなみが「いま現在、価値があると認められたもの」を取り扱うのに対し、「いまは未だ価値があると認められていないようなもの」を率先してフォーカスして、“新たな価値創出”という役割を担うことの重要性も、あわせて提起されていました。

★ペストフの三角形でみる現状

そうした NPO の自覚的な議論をリードするおひとり、静岡県において 1,000 名近いボランティアの力を集め、就労支援という分野で「静岡方式」というスタイルを生み出し、全国的にも名の知れた就労支援ネットワーク静岡の理事長で、静岡県立大学教授でもある津富宏さんと、3 月に滋賀県内で交流する機会にめぐまれました。

「ペストフの三角形」という津富さんから教えてもらった図をご紹介します（図 1）。ペストフはスウェーデンの政治経済学者で、「政府（再分配）」・「企業（交換）」・「共同体（互酬）」という異なる機能をもつ 3 つのセクターが交わる三角形で社会を表現しました。そこでは、中間にある領域を NPO が担うされています。この図式をつかって、現在の日本の社会を見てみると、次のように言えるのではないのでしょうか。

まず、三角形の左下の家族や共同体と言った助け



合い(互酬)の機能は、近代化以降、産業構造の変化などを受けて、一貫して収縮してきました。他方、政府機能は、ここ30年ほどの間に、日本でも、英米につづき新自由主義と言われる考え方が支配的となり、国家の再分配機能が後退しています。あわせて、企業を主役とした市場原理が強調され、社会の中に張り出してきました。

その結果、市場原理、競争社会からはじき出された存在が増加する一方で、かつては、家族や共同体の中で相互扶助できていたことが失われてきています。総じて、3つのセクターのすき間における無縁化が広がっていると言えそうです。

そうした社会において、津富さんたちは、NPOを組織し、たくさんの人びとの参加と協力によって、ふつうの市民が、市民に伴走して、助け合うという活動を実践されています。

★萃点を見出せば諸事の理がわかる

ところで、津富さんは、人びとの参加と協力によるご自身たちの実践のダイナミクスを、とても

ユニークな言葉で——地域における人びとのつながりを「生態系」と呼び、さらにその中でNPOが生みだす場を「萃点(すいてん)」と表現されていました。

「萃点」という言葉をご存じでしょうか？

有名な生物学者の南方熊楠(みなかたくまくす)が見つけた造語だそうで「たくさんの生き物が行き交い、出会う、交差点」のような点のことです。また、萃点を見出すことで諸事の理がわかる、と南方熊楠は書いているそうです。(図2)

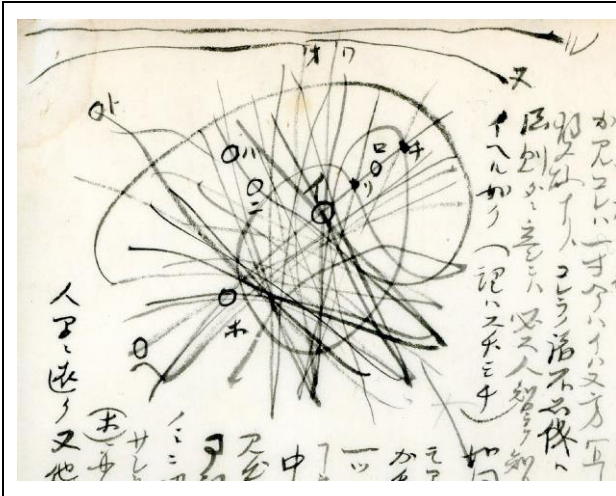
古くからある地域の共同体は、特定のエリアの顔の見える太く強い関係が基調です。それに対し、さまざまな人びとが、ゆるやかな広がり範囲にあって、「ほそく弱いつながり(関係)」を基調としたあり方もとても多くなっています。

そうした社会の中で、ほそく弱いつながりが、行き交い、出会う交差点(萃点)をつくるのがNPOの果たしている役割だということです。

また、津富さんからは、加えて、NPOが果たす社会的な役割として重要なことに、政府に対し

て主権者として、人びとの声を届け、必要な社会政策を求め、運動をおこしていく役割、また、企業に対しても社会のパートナーとして役割を果たすように求め、働きかけていくことがあると言います。

かえって、「琵琶湖のせっけん運動」を思い返せば、まさに、人びとの結節点となり、それを力に、政府や企業へも働きかけ、社会を動かしていた姿がありました。津富さんが示す NPO の社会的役割を果たしていたことを再確認できました。



(図2)「南方マンダラ」より

「この世間宇宙は、天は理なりといえるごとく (理はずじみち)、図のごとく (図は平面にしか画きえず。実は長、幅の外に、厚さもある立体のものとも見よ)、前後左右上下、いずれの方よりも事理が透徹して、この宇宙を成す。その数無尽なり。故にどこ一つとりても、それを敷衍追及するときは、いかなることをも見出し、いかなることをもなすうようになっておる」

※図中の「イ」が萃点 (すいてん) を示している。「中心ではない」という。

★“参加と協力”を力に

紙面ものこりわずかになりました。最後に、今後の碧いびわ湖の方針について、カンタンに紹介させていただきます。

「子どもと湖が笑っている未来へ」を合言葉に、あらためて、人びとの“参加と協力”の受け皿とされるように、まずは、理事会・スタッフが力を出して、取り組みを進めていきます。

重点となるのは、まずは、琵琶湖を愛する人びと、仲間が増えるように力を注ぎます。滋賀県の琵琶湖総合保全計画にもとづく「マザーレイクフォーラム」——琵琶湖流域の多様な主体が出会い、交流するプラットフォームを、琵琶湖を愛する人びとの「萃点」とできるように取り組みます。

つぎに、人びとが出会い、行き交う「萃点」として、各地域にひとびとのコモンズとして拠点スペースをつくるチャレンジをしたいと構想して

います。これまで進めてきた住まいづくりのスキルやネットワークを活かすとともに、大切にしたいものを共有する仲間たちとのコミュニティ・オーガナイズングを実践し、社会共通資本 (社会インフラ) を力を合せてつくり、その場を活用した助け合い、相互扶助、社会連帯経済活動を実践したいと考えています。

一昨年から学習を進めている経済学の知見も活かしながら、ここ30年近くつづくデフレ不況のもと、信用創造という貨幣に付随する機能にも着目し、人びとの方で、コモンズを形成するノウハウをつくりたいと思います。

また、紙パックのリサイクル、廃食油のリサイクルなど、長年、継続してきた活動も、わたしたちにとっての大切な財産です。集めて・使うという基本理念を語りながら、人びとの参加と協力をつのり、取り組んでいきます。 (了)

碧いびわ湖の事業概要

●原点はびわ湖のせっけん運動。草の根自治で暮らしをつくる。



1977年に起きたびわ湖の赤潮を契機に広がった「せっけん運動」と「草の根自治」が私たちの原点です。

一人ひとりが思いと経験を持ち寄り、対話の中から自分にできることを見つけ、協力し合う。

互いの弱さを受け入れあい、得意を活かしあうことで、誰もが大切にされる、安心・自信・自由の暮らしを守り、育てます。

●違いを理解し尊重し合って、違いを活かしあう。



一人ひとりの顔が異なるように、大事にしていることも、得意なことも違います。

その違いを対立にせず、逆に力を補い合い活かしあえるよう、碧いびわ湖では、相互理解と相互尊重ができるコミュニケーションを大切にしています。

●まず、あなたに合った入り口から、ご参加ください。

共同購入やイベントや活動への参加、住まいづくりのご相談、寄付へのご協力やご入会など、碧いびわ湖には様々な形でご参加いただけます。関心がおありのことから、まずは気軽にご参加ください。

【お問い合わせ先】

特定非営利活動法人 碧いびわ湖

電話 0748-46-4551

FAX 0748-46-4550

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3

メール info@aoibiwako.org

HP <http://aoibiwako.shiga-saku.net/>

子どもと湖が笑ってる未来へ

碧いびわ湖